

How To  *Write Books*

主婦作家として 成功する 方法

**How to
be a Successful
Housewife Writer**

エレヌ=ファントル=シンバーグ
赤尾秀子／訳



主婦作家として 成功する 方法

エレヌ=ファントル=シンバーグ

赤尾秀子／訳

講談社

主婦作家として成功する方法

定価 980円

発行 昭和60年3月5日 第1刷

著者 エレーヌ＝ファントル＝シンバーグ

監訳者 赤尾秀子

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

編集 株式会社 第一出版センター

東京都新宿区新小川町9番25号 日商ビル

郵便番号162

電話 東京(03)235-3051(代表)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社 堅省堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

©Hideko Akao 1985

Printed in Japan

ISBN4-06-188557-X (0) (セ)



目次

はじめに……………	5
第一章 本来に作家になりたい？……………	10
第二章 生活を整理整頓する……………	18
第三章 家事を締め出し家庭をオフィスにする……………	38
第四章 自分を信じて実現させる……………	64
第五章 家事をより早く、あるいはまったくやらずにすませるコツ……………	82
第六章 家族とうまくやっていく……………	127
第七章 拘束の手をふりほどく……………	156
第八章 アイデアはおもむくままに……………	177

第九章	知りたいことを知る……………	207
第十章	主婦だと悟られないインタビューの方法……………	225
第十一章	仕事として、ビジネスライクに……………	250
第十二章	出版にこぎつけるために……………	263
第十三章	結び——ここから始まる……………	279

装幀 波川育由

はじめに

私の名前を書店で見たことがなくても不安に思わないで下さい。私は合衆国の全国紙やあなたが聞いたこともないような雑誌にたくさん文章を載せてきました。そして、今度はあなたが主婦作家として成功する「チャンス」を手中にする番。「チャンス」なんて言葉は、今まであなたが専念してきた家事とは無縁のものだったでしょう？

私の納税書の職業欄は「作家」となっていて、その上主婦で、そして母親、おまけにペットの飼育係です。私もあなたと同じで、右手で家庭、左手で家事、そ

して三本めの手で作家活動をなんとかうまくやっているとうとしています。そしてその方法は、もちろん未だに調整中です。

女流作家の中には「主婦作家」と呼ばれることを嫌う人もいて、私が作家として母親としてすべてをどのようにこなしているかをインタビューしても、まったく無視して答えてくれない人もいたくらいです。そして後日彼女から手紙が届き、その中には太く大きなこう書いてありました文字で——私は主婦ではありませんん。

だけで全国的に有名な作家、マジヨリー・ホームズやジュディ・ブルーム、ベット・グリーン、その他たくさん作家が「主婦作家」という呼称の下に置かれるのを特に気にはしていないようです。

協力して一緒に家事をやってくれるスタッフがいるとしても、誰かが彼らに指示を与えなくちゃいけないわけで、それは通常、家の女主人「主婦」の仕事になってきます。

家庭の主婦から作家に転身した人がどれほど多いか、駅の売店や書店のベストセラーコーナーを眺めてみれば、一目瞭然でしょう。

作家になる以前の職業でもっとも多いのが「新聞記者」で、主婦は第三位の「政治家」にわずかながら差をつけて、何と二位。

しかし、私たち主婦にはフリータイムが多いからそんな結果になったわけではないし、周囲の人に勧められたからなったわけでもない私は思っています。たぶん書くことがたくさんあって、他人の生活に触れて

みたいがために書いているのではないかしら。それとも心の中から湧いてくる何かを満たすため、自分を表現するために書くという人もいるかもしれない。でもたぶん私たちは、職業欄に「ただの主婦」と書くのがイヤだから書いているんでしょう。

お金のために書く、他人の成功のごようばんに与かるのが耐えきれず、自分自身の名誉のために書く、自分が「何かをやることができる」のを母親や夫や自分自身に証明するために書く——いろいろな理由から私たちは机に向かい、ペンをとります。

私の場合は——書きたいという欲求があるから。妻として母親としてだけでは満たされないものがあるために書いているんだと思っています。どうしても作家になりたい、いつもそう思ってきました。毎日の生活のどうでもよさそうな雑事の中に人間らしさを見つけて、それを書きたいと思い、悲しい時は書いて涙をどっかへやっちゃんこもできるとわかってきました。怒った時、自分の間違いを正さねばならないと思った

時、何かを心に感じた時、美しいものの優しいものを他の人にも見てもらいたいと思った時に書く。他の女性と同じように、書かなくちゃいけないと思うから書く。

でも「なぜ」書くかということは、「どうやって」書くかということほど難しい問題ではありません。おばあちゃんがパッチワークをしていたように、私たちはつかの間のフリータイムをつなぎあわせて書かなくては いけません。主婦の時間はキッチンと決められたものではないし、なぜか面白いことに周りの人たちが「主婦の時間」を決めてくれています。ま、それでもいいでしょう。料理、洗濯、子供のための時間。でもどこかにまだ「書く時間」をちょっと割り込ませることが出来るはずです。

書くということを母親であることと主婦であることの中に完全に調和させ、一体化させることだててできません。掃除をし、外で子供を監督し、食事を作り、それでもまだ何かしなくちゃいけない時はそれを片付ける、こういったものすべてをうまくブレンドしてしま

う才能が私たち主婦には備わっているのです。旅行をしている時や子供の帰りを待っている時に書くことも出来るでしょう。

でも悲しいことにこういった利点は、不利な点にも早変わりします。自分だけの貴重な時間を他の人のために貸してあげることもできるわけですから。そして「何かもっと」を望むことに対する罪の意識はどんどん大きくなって、まるでロンドンの濃霧のように私たちを包みこんでしまうのです。

家庭は心のある所、そしてそこにはさまざまな人間の感情がいっぱい詰まっています。

けれど、男性作家にとっては家庭と関わずに執筆をすることがそう難しくありません。

「女房が電話に出てくれて、昼食の時間やお茶の時間には呼んでくれるし、子供たちがそばに寄ってこないようにもしてくれる」とはイギリス人作家の弁。

彼は、私が「書くための時間をつくること」に終始じたばたしていると知って当惑した様子でした。

ある男性作家が言うには「要するに自己鍛練の問題さ。書こうと決心すればそれを実現するために努力するんだ。」

子供たちはどうするの？ 食事は？ 洗濯は？ お客さまは？ 私がこう尋ねると、彼は手を振りながらいとも簡単にこう答えました。

「そんなもの全部女房がやってくれるよ。僕の仕事は書くことなんだ。そして彼女の仕事は家事をスムーズにこなすことさ。」

レティシア・ポルドリッジは以前ジャクリーン・ケネディの秘書だった女性で『妻、母、仕事の三役をこなす芸術 (Juggling: The Art of Balancing Marriage, Motherhood and Career)』の著者でもあります。彼女は自分の成功の理由に、次の三つを挙げています。

—— ユーモアのセンス、構成員、そして子供のめんどろをみてくれた乳母。

はつきりしているのは、主婦である私たち誰もが、妻と乳母を欲しいと思っていること。でも両方とも私

たちには手に入りそうもないから、残る二つ——ユーモアのセンスと構成員の方に目を向けた方が良さそうな感じで、それで私はこの本を書くことを思いついたという次第です。

本屋に行けば書き方や出版の方法について解説した本が山ほど手に入ります。もちろん本書も、その類のひとつ。本書の意図は、生活をより系統だて、家事をよりシンプルなものにし、割り込んでくるものにうまく対処し、そして家庭をオフィスにする方法をみなさんに提供することで、それもこれもみな書く時間を少しでも多くする、唯一その目的だけのもの。

自分の身のまわりにあるアイデアを発見し、発展させ、効果的にいろんなできごとを見つけ出す方法、そしてすべてを一つにひっくるめた仕事——主婦作家という仕事を成功させる方法が読んでいくうちにきとおわかりになるでしょう。

本書は、赤ちゃん、よちよち歩きの子供、十代の子供がいるお母さんのために、奥さんのために、家庭の

幸せを少しも削ることなく文章を書きたいと思つてゐる人のために書き記したものです。

私には、七歳から十六歳までの五人の子供と家の中と外を出たり入ったり自由にできる猫四匹、家の中だけで暮らしている猫一匹、おまけに二匹の犬がいます。そして私に息つく暇も与えてくれない活動的な夫（彼とはいついつまでもうまくやつていくつもり）と半径十マイル以内に素晴らしくたくさんのお親戚がいます。大家族で有名なあのケネディー・ファミリーでさえ私からみれば核家族みたいなもの。

でも私は、ここに述べるアイデアとテクニックで過去十七年の間に何百という記事、物語、グリーティングカードの詩を書きつづけてきました。

はたして主婦作家になることは、精一杯働き、努め、打ち勝ち、望む価値のあるものなのか？ ひとつ賭けてみましょう。

赤ちゃん、炊事、そして文筆業という仕事をたった一つのお鍋の中で混ぜてしまうのです——でも焦げつ

かない様、常にかきまぜてゐることを忘れずに……。

第一章 本当に作家になりたい？

私たちが漠然と望んでいるもの——若々しい十代の頃の姿、いつの間にかピカピカになっている台所……。

シャワーを浴びながらそっと口にする……洗濯機に洗剤を入れながら呪文のようにつぶやく……自分だけの秘密の思い……バスデーケーキのろうそくを吹き消す時と同じで口に出してしまおうと何か不吉なことが起こりそう。「大きくなったら看護婦さんになりたいな」

もちろん看護婦は立派な仕事です。看護婦、教師、秘書、こういったものは「ノーマル」な人々が就く職

業——では作家は？ 作家は酔っぱらいのインテリの仕事。それに自分は結婚していて子供もいる普通の女性——でもそれだけで満足ですか？

ノー。洗濯機のまわる音を聞きながら雑誌を読み、布団の中で小説を読み、お湯が沸くのを待ちながら新聞のコラムを読む。「私だったらもっと上手に書けるのに」と心の中でつぶやく。さっき掃いたばかりなのに枯葉がまた庭にたくさん落ちている。もう一度、掃かなくちゃ。子供たちが何か叫んでいる。ミルクはあったかしら？ 昨日買っておいたから大丈夫。遠くに

タイプを打つパチッパチッという音が聞こえる……。

何か永遠のもの、明確なものに対するあこがれが主婦を作家という職業へつき動かします。原稿はできあがった途端に食べられてしまうものではないし、ポタンをつけてやる必要ありません。家事より「不変」なものです。大体家事というものは、いなかっただけ皆が気づくものでしょう。

ではどうやってとりかかれば良いのか？ 準備もなく喧騒に満ちた都会に物見遊山で飛び込むか、それとも長い船旅のプランを事前に練っておくか。成功と幸福を手に入れるために、目的地はどこか、そして何を「つめこんで」いけば良いのかを今から整理することにしましょう。

動機は一体何か？

「なぜ」書きたいか、という理田を知っておくことは重要なことです。主婦作家として立派にやっつけているかと思っ

動機なんていうものは十人十色で、お隣の奥さんとあなたとは違っているでしょうし、時代とともに変化もします。目標が何であれ現実的に考えて、ただでさえ忙しい主婦という仕事に、もう一つ新しい仕事を加えたいという理由が何なのか、はっきりと知っておきましょう。

さあ、今その理田を考えてみて、

- 1 臨時収入が欲しい
- 2 自分の「名前」が欲しい
- 3 子供の頃の夢をかなえる
- 4 兄弟姉妹と張り合う
- 5 両親に対して何かを証明する
- 6 自分自身を表現する
- 7 暇な時間をつぶす
- 8 できるかどうか試してみる
- 9 自尊心を満足させる
- 10 不道德なことをする

正解も不正解ありませんよ。自分に正直になり、現実のものとして考えてみて下さい。プロとして書くことはハードワークだけれど面白く……そして決断がで、鍛錬と苦痛を伴います。何年かかっても売れない作家もいれば、出版経験はあってもほとんど収入を得られない人も中にはいます。

始めっから十萬ドル稼げるかどうかもあるまいし、新刊紹介に載らない可能性だってあるのですから。もちろん例外だってあります。だけど、例外は例外だから例外なんですよ。

ただし基本的な才能と粘り強さがあり、市場というものを知知していれば、自分の作品を活字にすることはもちろん可能です。

時間を割くことに抵抗はない？

どれくらいの時間が必要か？ 特に決まりはないわけ、もちろん原稿用紙二枚の記事を書くよりは小説

を書く方が時間がかかります。

ただ、実際に書くための時間だけではなくて、調査したり、何度も校正したりという時間が必要です。耐久力がありますか？ 時間を割くことが可能ですか？ ではどうやってその時間をつくり出しますか？

時間が「すでにある」必要はなくて、それを「つくり出す」ことが必要になってきます。主婦作家として頑張っている人たちは皆、時間を捏造する芸術家です。私たちは大概無器用で、多数派に属そうとし、交わり者に見られないように努力するけれど、そのことをちゃんと自覚していて、だけど他の人とはちよっぴり違っているって内心思っているはず。どうすれば非難されずに、融通がきく順応性のある人間に見られるかはもう十分にわかっているでしょう。

「女性の仕事というものは……」この難解な問題を論じた何百という本や雑誌が書店に並んでいます。実際女性の職業は非常に多様で、私たちのおばあちゃんは裁縫をし、ジャムを作り、子供たちの面倒を見、そし

て夫の仕事を手伝ったりもしました。私たちは仕事の途中で邪魔が入ればどうしたらいいかすぐに判断する術を心得、「家庭」という名で知られる小さな仕事を一所懸命こなしています。

主婦はある仕事からまた別の仕事へといつも頭を働かせながら跳びはねる「ばった精神」を持っている、とは私の友人の言です。まったく邪魔の入らない落ちついた時間が執筆するのにもっともふさわしいと私は思っているけれど、かといって必ずしも最高のコンディションの中でしたか仕事ができないとは思いません。

自分にとって今この時が、人生の中でどのような位置を占めるべきなのか、冷静に見つめ直すことが大事なのです。例えば、まだおむつのとれない赤ん坊が三人もいて手伝ってくれる人はいない、病気の姑もいるという環境であれば、子供が皆学校に行って一日中家にいないという環境よりもフリータイムをつくることが難しいのは当然でしょう。だからといって書く時間がまったくないわけではなくて、少しばかり面倒にな

るだけのことです。

自分のやりたいことと自分の時間についてじっくり考えてみれば、一見そうは見えないけれど、書くことも仕事のうちだとわかってきます。誰もが文章を書くことができるわけで、机と原稿用紙さえあればそれでいい。子供を育てるのと同じように、自分には天性の書く才能があるんだと思えてくるに違いありません。

初心者は大抵まず始めに短文を書いて、それを「レッドブック」とか「ハウスキーピング」に送り、そして返送されて驚く、というパターンです。プロとしての絵の描き方も学ばず、基本的なトレーニングも積まずにバイオリンを弾くと、このような結果になるのはアタリマエですよね。文章を書くことも「技術」の一つ。自分の書こうとしているタイプ——小説、劇、ノンフィクションなど——の基本を知り、技術を学ばなくては。やり直しもたくさんあって、アウトラインを見直すとか、何を言いたいかをもう一度考え直してみるなど、他の芸術と同じように書くことも技術と訓

練を必要とします。

危険を冒すのもいとわない？

この見出しは、スカイダイビングについて書きたい時はスカイダイビングをやってみようという意味ではなくて、今までと違った日常生活を送る危険性のことを指しています。つまり、しなくちゃいけない仕事があるためにさまざまな怒りや嫉妬で悩まされたり、笑われたり、遊び友達を失ったり、良い出来だと思った作品が不採用になったり、自分の題材と同じものを扱った作品がすでに出版されていたと投稿した後にかかったり、などなどなど。

私は本書を書いている間、多くの作家に「主婦作家になるのはなまやさしいもんじゃないと書いておけ」と言われました。この言葉は決して意地悪で言っているわけじゃなくて、ただ現実的だけで、原稿の不採用がつかいものだということを彼らはよく知っているのです。不採用も身のうち、グツとこらえて書き続け、

でも、やっぱりつかいものはつかい。泣き叫んで辞めるか、泣きべそをかきながらも続けるか？

もし作品が採用されてもやはりリスクはあります。

友人がその作品を内心下品なものだと思うかもしれないし、自分のことについて書かれたと思って傷つく親戚が出てくることだってあり得ますから。

作品批評を読んでプロが意気消沈することもあって、ある作家は最新作が絶賛されたにも関わらず、たった一つの酷評のおかげでずいぶん動揺したと私に語ってくれました。

「たくさん誉めてもらったし、その数に比べればたった一つでしかないってことはわかってたけど、そのたった一つの酷評のことばかり考えて、落ちこんでしまふのよね。どうしてその人は私の作品を気に入ってくれなかったんだろうって」

作家になるには神経が太くなくちゃいけないのだけど、私たちの大半はそんなに厚顔ではないはずで。私たちは繊細で感情的で愛されることを望む、人間ら